

文化人類学からみた高齢者——社会と関わる、社会から離れる

島根大学法文学部 福井栄二郎

文化人類学は異文化（あるいは自文化）の「物語」を解釈する学問である。本発表は異文化／自文化を横断しながら、老いに関する「物語」を明らかにした。

そもそも「老い」というものそれ自体が、文化的に定義されている。日本のように実年齢（暦年齢）で「高齢者」が規定される文化もあれば、相対的な指標（白髪、閉経、体力の衰えなど）で決まるところもある。もちろん時代によっても高齢者の定義は変化する。

これまで文化人類学者にとって高齢者は「よき友人」だとされてきた。伝統的なものを見聞きしようとする、どうしても高齢者に頼ることになるからだ。しかし高齢者そのものが研究対象になったのは、1980年代に入ってからである。背景には、世界各地の急速な近代化・グローバル化と、それに伴う社会変化がある。本発表ではディネ（カナダ先住民）、アスマット（インドネシア）の事例を報告したが、いずれも近代化のなかで高齢者の地位や位置づけが変化したことがわかる。

発表後半では、発表者が断続的に調査しているヴァヌアツ・アネイチウム島の高齢者について論じた。アネイチウム社会では暦年齢ではなく、むしろ身体的な変化によって「高齢者（*nomrag*）」と称されるようになる。高齢者の肯定的なイメージとしては「博識」「穏やか」「リーダーシップ」などが、否定的なものとしては「頑固」「物忘れ」「身体の衰え」などが挙がる。このあたりは日本と似ている。

他方、日本と大きく異なるのは、老いに対する「恐怖」のようなものがあまり見られないことである。発表者はその要因を高齢者の社会的な役割の有無だと見立てている。アネイチウムでは高齢者といえども、簡単に「隠居」とはいかない。身体が動く限り畑仕事は毎日行うし、家畜の世話、薪割り、料理、孫の面倒など、日々の仕事をたくさんこなす。村で揉め事が起こるとその調停役になるのは高齢者であるし、島全体で決め事があると、そのリーダーシップを取るのも彼ら／彼女らである。島では、各人の「個人名」がとても重要な役割を果たすのだが、新生児が生まれたときの命名もまた高齢者の重要な仕事である。

つまり高齢者には多くの社会的役割が当てられている。換言すれば、彼ら／彼女らがいないと、島の生活は回らないのである。もちろんひとりひとりが異なった知識や技術や関係性を持ち、それぞれがみな「かけがえのない」存在となっている。この代替不可能性があるからこそ、彼らは匿名性のなかに埋没しないし、若者たちも高齢者たちを当然のように支えることになる。

一方、私たち日本人は経済的生産性を至上価値とするので、老いは「無価値」となる。老いの「恐怖」はこのあたりから生まれるのだろう。高齢人口がますます増える日本社会において、私たちは、今後、どのような社会像をイメージ、あるいはデザインするのか。そう考えたときに、ヴァヌアツの人々の「老いの物語」は参考になるところが大きいだろう。